高等教育フォーラム　Vol.1, 2011

「京都産業大学　高等教育フォーラム」創刊号刊行によせて
―教育の質保証と研究・教育・学習の連携―

所長 有本 章
比治山大学高等教育研究所

この度、貴教育支援研究開発センターが「京都産業大学　高等教育フォーラム」を創刊される運びになりましたことを心からお慶び申し上げます。貴学には講演でお招きいただいたこともあり、平素から熱心に教育研究の充実に取組んでおられることに敬意を表してまいりましたが、そのような改革にさらに新しい1ページを追加されるのはまことに有意義でありますし、ご同慶の至りに存じます。

貴学における組織的な取組みの中核に「教育の質保証」が置かれていることは、とくに1990年代以後において、日本の大学改革が教育改革や「教育革命」の時代に入ったと言われることからしても、本質的な取組みであると拝察します。いうまでもなく、教育の中枢に位置するのは授業あるいは「教授―学習過程」でありますから、「教育の質保証」とはその質を所期の教育理念・目的・目標のレベルに高めることを意味すると解されます。そのためには、何よりも教育改善や授業改善が問われると言えるでしょう。もとより、授業はカリキュラム、教員、学生という3点セットによって構成される以上、その改善は、少なくともこの3つの要因の改善に直結することになります。

このうち、カリキュラムについては、広くアドミッション・ポリシー、ディプロマ・ポリシーと呼応したカリキュラム・ポリシーとして、大学全体の教育改革にかかわる総合的な観点からのアプローチが問われますから、当然ながら教員や学生が内包されると言えるでしょう。それと同時に3点セットに限定すると、これら相互の連携・統合が重要になるとみなされますが、それにもかかわらず、現在の大学の多くはその実現が困難になっていると観察されるのではないでしょうか。その欠如は、学生の学習力や学力を阻害するばかりか、学士力や就業力など卒業時の質保証に支障を来すという結果を招かざるを得ません。

連携や統合のなかで教員と学生の連携を俎上にのせると、教員の研究と教育、学生の学習の間のつながりが十分であるか否かが問題になります。いわゆるフンボルト理念では、R-T-S nexusという研究・教育・学習（＝学修）の連携が追求すべき課題となりますが、現実にはこれは極めて実現しがたい課題であることが分かります。その証拠に、われわれが実施している世界18カ国の大学教員を対象とした国際調査（CAPプロジェクト）では、研究と教育の両立困難とする日本の大学教員の割合は世界最高を示しております。この事実は研究志向や教育志向が分離して、タコツボ化していることの証左にほかなりません。教育の質保証を遂行するには、最先端の研究成果を授業へ取り入れ学生へ伝達することを通して、研究で醸成される研究力、創造力、問題解決力などを学生に効果的に喚起することが必要不可欠のプロセスとなります。ユニバーサル化が進行し、学生の超多様化が促進される21世紀には、このプロセスは一段と重要性を高めると推察されるところです。

こうして研究と教育を連携し、さらに学生の学習力と連携して、研究・教育・学習の連携・統合まで貫徹してこそ授業の質保証は豊かに実現すると考えられます。もし、それが欠如して、研究と教育が乖離して、教員が教育のみに専念すればよいとなると、それはもはや大学教員ではなく、小中学校教員になってしまいます。その意味から、現在の日本の大学教育は世界的にさらなる改善を期待される段階にとどまっているとみなされざるを得ない以上、連携・統合へ向けて、システム、大学、組織をあげた改革が欠かせないと言わなければならないでしょう。

貴センターを中心とした大学全体の取組みは、このような日本的状況を打開するために先進的な改革を導くものと確信しております。創刊号刊行を契機に「教育の質保証」の試みが一層発展を遂げることを心から祈念する次第であります。

注）平成23年4月1日から有本　章氏は、くらしき作陽大学学長に就任